水と傘

北杜市立甲陵中学校　三年
進藤 美月
絵
シノダタクヤ

「あー。今日、雨かあ。」

私は雨が嫌いだ。濡れるし、なんだか暗い気持ちになるから。

玄関を開けて学校に行こうとした私は思わずため息をついた。

どうやら今日は雨らしい。しかも勢いが強めの。はーあ。なんだか今日はツイてないのかも。

そう思いながら家にあった適当な傘を差し、外へ出た。その時だった。

「なに浮かない顔してるっサ」

何か声が聞こえた。少し高めで、アニメでよく見る感じのゆるっとした声。

周りを見渡しても誰もいないし…。私疲れているんだ。幻聴が聞こえるほど疲れているなんて。

「違うっサー！僕は君が今さしてる傘っサ」

え。驚いて傘を見てみるとさっきまでなかった顔がついている。

傘の化け物だ。固まっている私に対して傘はこう続けた。

「僕は化け物なんかじゃないっサ。僕は君が雨の日でも楽しんでくれるように来た傘っサ！」

傘が自信ありげにそう話す。しかもいつの間にか心も読まれている。

怖いし家においてこようかとも思ったけど、傘が駄々を言って聞かないので一緒に登校することにした。

「実は雨って自然に恵みをもたらすこともあるっサ。

野菜や稲とかは特に、水がたっぷりないといけないから雨がないと育たないっサ。」

そう傘が話し始める。てっきり雨が無い方が野菜や稲は育つのだと思っていたがそうでもないらしい。

しかし稲、お米が雨がないと育たないというのには驚いた。

「そうっサ。土の中の養分を吸った雨が稲や野菜にたくさん栄養を与えて、大きく育つっサ。

だから、君が毎日朝ご飯を食べられるのは雨のおかげでもあるっサ。」

私の嫌いな雨もそんな風に役に立つんだ。

今まで雨には悪い印象しかなかったけれどそんな所もあるのだと思った。

「しかも、しかも、雨のおかげで君たちは水をたくさん使えてるっサ。

もし雨がなくなってたら、日本は水不足で困っていたかもしれないっサね。」

毎日自由に水が使えるのも雨のおかげなんだ。

そう考えると雨ってやっぱり大切なのかも。

「そうっサ。雨の日は気分が落ち込みやすいかもしれないけど、

実はみんなを支えている縁の下の力持ちっサ。

だから、雨の日の嫌なところばっかり見るんじゃなくて、

もっといいところも見てほしいっサ」

その通りだと思う。今までは雨が嫌いだったけど

傘の話を聞いていくうちにどんどん雨が好きになっていった。

こんな気持ちになったのも傘のおかげだ。ありがとう。

そう言おうとしたらいつの間にか傘の顔は消えて、

声もしなくなっていた。

それでもまだ、雨は続いている。

しかし、その雨は玄関にいたとき感じた暗い印象とは違い、

綺麗でさわやかなものだった。